

国際ブドウ・ワイン機構(OIV)の第42回世界大会 での研究発表及び大会プログラム参加報告

児玉 徹

1. はじめに

2019年7月15日から19日にかけて、国際ブドウ・ワイン機構(L'Organisation Internationale de la Vigne et du Vin/以下「OIV」と称す)の第42回世界大会(42nd World Congress of Vine and Wine/以下「本大会」と称す)が、スイスのジュネーブにて開催された。本大会は、「Preserve and Innovate: Environmental, Economic and Social Expectations」という統一テーマのもとで開催され、開催期間中、世界50カ国から約750人の参加者があり、大会期間中に348の口頭による発表がなされた⁽¹⁾。本大会の会場となったジュネーブ国際会議場(International Conference Centre Geneva)では、口頭発表以外にも、ポスター発表や、スポンサー企業によるブース出展、そして大会参加者の交流を深めるための昼食パーティなどが開催された。また同大会のプログラムには、世界中から集まってきた参加者が国際的なネットワークを構築するための様々な機会が用意されており、それら機会では、スイス産ワインやスイスのワイン生産地に関するPRも活発に行われた。

筆者は、本大会に参加し、「GIs and the concept of terroir for the development of local wine and sake clusters in Japan」と題する研究発表を行った。同発表内容をまとめた同じタイトルのFull Paperについては、2019年10月発行のオンラインジャーナル「*BIO Web Conference, Volume 15, 2019, 42nd World Congress of Vine and Wine*」に掲載された⁽²⁾。同時に筆者は、同大会のプログラムに組み込まれていた様々なイベン

(1) OIV ホームページ上の2019年7月22日付ニュースリリース：

<http://www.oiv.int/en/oiv-life/42nd-oiv-congress-the-third-in-switzerland-is-a-huge-success>

(2) Kodama, Toru (2019). GIs and the concept of terroir for the development of local wine and sake clusters in Japan. *BIO Web Conference, Volume 15, 42nd World Congress of Vine and Wine*. Retrieved from <https://doi.org/10.1051/bioconf/20191503006>

トにも参加した。本報告書においては、本大会における筆者のそれら活動内容の概要を記したい。なお筆者による本大会への参加及び研究発表は、科学研究費プロジェクト「ワインツーリズム推進策の国際比較的地域からの政策人類学的な分析」(期間：2018-2020年度/研究代表者：児玉徹)の一環として行われたものである。

2. OIVの概略

まず、OIVとはどういう機関なのか、という点について簡単に説明しておきたい。上述のとおりOIVの正式名称は「L'Organisation Internationale de la Vigne et du Vin」であり、英語での正式名称は「International Organisation of Vine and Wine」である。日本語ではもっぱら「国際ブドウ・ワイン機構」と称される。

OIVの前身となる機関「International Wine Office」がフランス、ギリシャ、ハンガリー、イタリア、ルクセンブルク、ポルトガル、スペイン及びチェルノブイリの八カ国の合意によってフランスのパリに設立されたのは1924年のことで、1958年に同機関の名称は「International Vine and Wine Office」に変更された。そして2001年に、同機関を引き継ぐ形で、35カ国の合意のもとにOIVが設立され、本部をパリに置きながら現在に至るまで活動を行っている。OIVのホームページによれば、2018年11月6日時点でのOIVの加盟国数は表1に記載されている47カ国で、日本は加盟国ではない⁽³⁾。図1は、OIVのホームページから抜粋したOIV加盟国の分布図である⁽⁴⁾。

OIVの意思決定機関は、これら加盟国を代表する者で構成される総会(General Assembly)である。またOIVの主な活動財源は、これら加盟国からの拠出金である。なお本大会の最終日(7月19日)の午前に、本大会の会場であるジュネーブ国際会議場にて、OIVの総会が開催されたが、こちらは専らOIV加盟国からの関係者を対象としたものであり、筆者は参加していない。

上述の正式なOIV加盟国以外にも、OIVの認める国や地域、国際機関が、オブザーバーという立場から、OIVの活動に参加している。現時点でこのオブザーバーとしての参加権を与えられているのは、表2に記した主体である⁽⁵⁾。

このオブザーバーとして、中国から、煙台市(Yantai)と寧夏回族自治区(Ningxia Hui autonomous region)の地方自治体がOIVの活動に参加していることは注目に値す

(3) OIVのホームページ：

<http://www.oiv.int/en/the-international-organisation-of-vine-and-wine/member-states-and-observers>

(4) 同上

(5) 同上

表1：OIV加盟国一覧

Algeria / Argentina / Armenia / Australia / Austria / Azerbaijan / Belgium / Bosnia-Herzegovina / Brazil / Bulgaria / Chile / Croatia / Cyprus / Czech Republic / France / Georgia / Germany / Greece / Hungary / India / Israel / Italy / Lebanon / Luxemburg / Malta / Mexico / Moldavia / Montenegro / Morocco / Netherlands / New Zealand / Norway / Peru / Portugal / Republic of North Macedonia / Romania / Russia / Serbia / Slovakia / Slovenia / South Africa / Spain / Sweden / Switzerland / Turkey / Uruguay / Uzbekistan

図1：OIV加盟国の分布図（OIVのホームページからの抜粋）



表2：OIVオブザーバー機関

EU - European Union
 AIDV - International Wine Law Association
 Amorim Academy
 AREV - Assembly of Wine-Producing European Regions
 AUIV - International University Association of Wine
 CERVIM - Centre for Research, Environmental Sustainability and Advancement of Mountain Viticulture
 FIVS - International Federation of Wines and Spirits
 OENOPPIA - Oenological Products and Practices International Association
 UIOE - Union Internationale des Oenologues
 VINO FED - World Federation of Major International Wine and Spirits Competitions
 ASI - Association de la Sommellerie Internationale
 WIM - Wine in Moderation
 Yantai (China), prefecture-level municipality
 Ningxia Hui autonomous region, China

近年、中国は、ヨーロッパのワイン生産国等からの技術協力を受けながら、国際競争力のある国産ワインの生産に力を入れており、煙台市および寧夏回族自治区ともに、中国有数のワイン産地として成長してきている。こうした背景のもと、中国としては、自国のワイン産業の国際競争力強化策の一環として、OIVに足掛かりを残しておきたいのだろう。

なお、日本がOIVの加盟国ではないことは既に述べが、世界第四位のワイン生産量を誇るアメリカもOIVの加盟国ではない。アメリカは過去にOIVの正式加盟国であったが、2001年に離脱した。その理由は、ワイン醸造に関する基準、地理的表示の保護、OIVの意思決定プロセスに関するアメリカとヨーロッパ諸国との間の意見の対立にあったと言われている⁽⁶⁾。ただし、OIVの世界大会において研究発表を行う者が、OIVの加盟国に属している必要はなく、本大会においては、OIV加盟国ではない日本からの参加者であった筆者が研究発表を行い、またアメリカからも五つの研究者グループが口頭発表を行っていた。

ではOIVはどのような機能を担っているのか。この点について、OIVが発行する「Understanding the OIV」というガイドブックによれば、OIVの主な役割は、(1)ブドウ栽培・ワイン醸造に関する産業(vitivinicultural sector)についての国際的な統一基準の策定、(2)研究調査とその成果の発行、(3)統計的データの整備、(4)教育及びコミュニケーションの四つに分類できる⁽⁷⁾。

第一の役割「ブドウ栽培・ワイン醸造に関する産業についての国際的な統一基準の策定」について、OIVは、以下のような基準の策定や情報共有を行っている。

- ・ブドウ栽培及びワイン醸造に関する基準
- ・ワイン等のブドウ由来の商品に関するラベル表示基準
- ・世界で開催されるワイン・蒸留酒に関するコンペティションでの審査基準
- ・特定分野での優れた取り組み(good practice)についてのガイドライン

第二の役割「研究調査とその成果の発行」について、OIVは、ワイン業界を取り巻く世界情勢を鑑みつつ、特に重要ないくつかの分野に焦点を当てて、国際的な研究者ネット

(6) Compés López, Raúl (2019). International Wine Organizations and Plurilateral Agreements: Harmonization Versus Mutual Recognition of Standards. In *The Palgrave Handbook of Wine Industry Economics*, edited by Alonso Ugaglia, Adeline, Cardebat, Jean-Marie, and Corsi, Alessandro. Palgrave Macmillan.

(7) OIVが発行するガイドブック「Understanding the OIV」は、こちらのウェブサイトからダウンロード可能：<http://www.oiv.int/public/medias/6345/en-understanding-the-oiv-web.pdf>

ワークを活用しながら研究を行っている。上述のガイドブックによれば、「ブドウ栽培の持続可能性 (Sustainability of Viticultural Production)」と「健康・食品衛生 (Health and Safety)」の二つの分野が、重要研究課題となっている。

第三の役割「統計的データの整備」について、OIVは、ブドウ栽培・ワイン醸造に関する産業 (vitivinicultural sector) についての多種多様な統計データを整備して、ホームページ上で公表している。そのひとつが、本大会初日にOIVのPau Roca事務局長がプレゼンを行った「State of the vitiviniculture world market」と題する統計データである (下記参照)。

そして第四の役割「教育及びコミュニケーション」については、研究助成金の提供や、世界で開催されるワイン・蒸留酒のコンペティションへのサポート、ブドウ栽培・ワイン醸造に関する優れた書籍の表彰、そしてワイン関連の修士号 (Master of Science in Wine Management) の取得を目的とした教育プログラムの提供である。

本大会を含んだOIVの世界大会 (World Congress of Vine and Wine) の開催もOIVの重要な機能のひとつである。

なお、上述のOIVの第一の役割には、ワイン用ブドウ品種の特定及び登録が含まれている。そしてEUには、ブドウ品種をワインラベルに表示するためにはその品種がOIVを含む三つの国際機関のいずれかに登録されていなければならないことを定めた規制 (Regulation 607/2009の第62条(1)(b)) が存在し、同規則は輸入ワインにも適用されるため、日本固有のぶどう品種を使用した日本ワインのEU輸出を見越して、日本固有のブドウ品種である甲州が2010年に、マスカットベリーAが2013年に、それぞれOIVに登録されたことを付記しておきたい。

3. 本大会における筆者の発表について

3-1. 発表に至るまでのプロセスについて

ここで、本大会での研究発表に至るまでの大まかなプロセスについて述べておきたい。まず、本大会で口頭発表するためには、2019年3月初旬までに、発表内容の要旨をまとめたAbstractを同大会事務局に提出することが求められた。そして提出の際には、「Viticulture」「Oenology」「Economy and Law」「Safety and Health」の四つのカテゴリーの中から一つを選んで提出することも求められた。さらにOIVの公用語が英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語の五言語とされていることから、Abstractは、英語バージョンとともに、その他四つのOIVの公用語から二カ国語を選んで、それぞれの言語でのバージョンも用意して (つまりは合計で三カ国語のバージョンを用意して)、提出することが求められた。筆者は、カテゴリーとしては「Economy and Law」を選択し、英語バージョンと共にフランス語とドイツ語のバージョンの

Abstractを作成して、提出期限までにOIV事務局にメールで提出した。

その後、2019年4月中旬に、OIVの本大会運営事務局から筆者に対して、筆者が提出したAbstractがOIVでの審査会(The Reading and Selection Committee)による審査を通過した旨のメールが送られてきた。またそのメールには、4000字以内でまとめたFull Paperを同年5月末日までに送付することが本大会での口頭発表の条件であること、そして本大会での口頭発表及び質疑応答を経なければ同Full Paperはオンラインジャーナル(BIO Web Conference)において掲載されないことが記載されていた。

これに応じて、筆者の発表内容に関するFull Paper(タイトルは「GIs and the concept of terroir for the development of local wine and sake clusters in Japan」)を、同期日までに同事務局にメールで送信した。その後、下記のとおり、本大会の二日目(7月16日)の午前(第一部)において口頭発表及び質疑応答を行い、上述のとおり同Full Paperは、2019年10月発行のオンラインジャーナル「BIO Web Conference, Volume 15, 2019, 42nd World Congress of Vine and Wine」に掲載された。

3-2. 発表当日における筆者の発表

筆者は、本大会二日目(7月16日)の午前8時30分から10時20分にかけて開催された「Economy and Law」のカテゴリーでの発表会において、6人の発表者の一人として、口頭発表を行なった。こちらは同日午前の第一部口頭発表会と位置付けられており、このあと、第二部が午前10時50分から12時30分の間で開催された。

同発表会での発表者として、もともと筆者を含む7人の発表者の登壇が予定されていたが、そのうちの一人が直前で発表をキャンセルしたため、結果として同時間帯での発表者は6人となった。司会進行は、OIVのLaw and Economy Commissionの委員長を務めるブルガリア人のDimitar Andreevskiさんと、Changinsというワインプロフェッショナル育成のためのスイスの国立教育機関でディレクターを務めるConrad Briguetさんが行なった。発表の場となった部屋は100人ほどが入れるサイズで、8割ぐらゐの席が埋まっていた。

筆者の研究発表のタイトルは、「GIs and the concept of terroir for the development of local wine and sake clusters in Japan」で、内容は、日本のワイン産業と日本酒産業、それら産業に関連するツーリズム等を推進する目的において、日本の地理的表示制度と「テロワール」という概念がどのように活用され得るのか、そのための課題は何か、といった点に焦点を当てたものであった。

なお、OIVの世界大会での口頭発表者は、上述の五つの公用語から任意の発表言語を一つ選んで口頭発表を行い、その口頭発表内容が、その口頭発表言語以外の四つの公用語に同時通訳される、というのが慣行となっている。本大会において、筆者は英語で発表を行った。

実は、筆者の研究発表については、OIVの事務局が本大会前の2019年7月9日に本大会ウェブサイト上で掲載した広報ニュースにおいて、「注目される発表」のひとつとして言及されていた(資料1の下線部分を参照/下線は筆者が追加)。つまり、OIV事務局としては、筆者によるプレゼンの内容に本大会前から興味を抱いていたことになる。

筆者を含め、本大会の口頭発表者に与えられた時間は20分で、その時間の中でプレゼンを17-18分で、そして質疑応答を2-3分で、それぞれ行わなければならないとされていた。この20分という割り当て時間は「厳守」である旨が事前に伝えられていたため、事前に提出した4000字のFull Paperの内容を、17-18分のプレゼン時間に収めるべく、PowerPointスライドの内容を作り込み、さらに事前に何度も繰り返しプレゼンの練習を行った。そのおかげで本番では、滞りなく、時間通りにプレゼンを終えることができた(写真1)。上述のとおり、筆者は英語で同プレゼンを行ったのであるが、その内容は会場にいた同時通訳者によりOIVの他の四つの公用語(フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語)に同時通訳された。

そのプレゼンを終えた後、続けて質疑応答タイムに突入し、会場から五つほどの質問を矢継ぎ早に受けた。上述のとおり、筆者によるプレゼンの前の時間帯で登壇を予定していた方が、急遽登壇ができなくなったとのことで、その分、筆者には15分ほどの質疑応答時間が割り当てられた。これにより、全ての質問に対して時間的に余裕を持って回答することができた。

筆者が受けた質問の内容としては、日本における地理的表示の知的財産権としての位置づけに関するもの、日本酒産業におけるヴィンテージ(vintage)概念の導入可能性に関するもの、日本政府によるブドウ農家への支援策に関するものなどで、どれも、ワイン分野の研究者・専門家が集まるOIV世界大会ならではの的を得た質問であった。


また、筆者がプレゼンの中で言及した「ワインのテロワールと日本酒のテロワールの比較的考察」は、会場にいた方々の興味を引いたようで、発表後の休憩時間に、会場にいた方々と名刺交換をした際にも、この点に関してさらに追加的な質問を受けた。日本産のワイン(通称「日本ワイン」)だけでなく、日本酒に対する世界での関心の高まりを感じた次第である。

なお参考までに、筆者は、科学研究費プロジェクト「ワインツーリズム推進策の国際比較的地域からの政策人類学的な分析」の一環で、2019年の3月から4月にかけて、スペインのヴィトリア=ガステイス(Vitoria-Gasteiz)で開催された第11回国際ワインツーリズム会議(11th Annual International Wine Tourism Conference)⁽⁸⁾、フランス・パリで開催されたFood & Society International Conference、ベルギーのルーヴェ


(8) 第11回国際ワインツーリズム会議のホームページ:

<https://www.iwinetc.com/iwinetcspeakers/toru-kodama/>

資料1：本大会前にOIVがホームページで掲載した2019年7月9日付プレスリリース
(OIVホームページからの抜粋/下線は筆者が追加)



42nd CONGRÈS MONDIAL DE LA VITICULTURE ET DU VIN




OIV
Organisation internationale
de la vigne et du vin

Tuesday, July 9th, 2019

MEDIA INVITATION: PRESS CONFERENCE
42nd World Congress of Vine and Wine in Geneva

MONDAY 15 JULY 2019 at 12:15 to 13:15
International Conference Centre Geneva (CICG)
Rue de Varemboé 17, CH-1202 Geneva

500 international experts to discuss current issues for the sector and discover Swiss wines



PRESS CONFERENCE – MEDIA INVITATION
42nd World Congress of Vine and Wine in Geneva

MONDAY 15 JULY 2019 at 12:15 to 13:15
International Conference Centre Geneva (CICG)
Rue de Varemboé 17, CH-1202 Geneva

500 international experts to discuss current issues for the sector and discover Swiss wines

Invitation Media (E) Invitation Media (F)
Invitation Media (D)

INTERNATIONAL GENEVA AND WINE

International Geneva is a unique concentration of dozens of international organizations, hundreds of permanent missions, NGOs and academia. Several organizations based in Geneva play a role in global vine and wine governance such as the World Trade Organization (WTO); World Intellectual Property Organization (WIPO); World Health Organization (WHO); United Nations Economic Commission for Europe (ECE) ...

In this video, Massimo Vittori, Managing Director of the NGO OriGIn (a global alliance of 550 geographical indications groups) talks about the role that Geographical Indications (GIs) can play to further the wine sector sustainability. You can hear more on this topic during the Congress, for example from a presentation by Adriana Verdi from Brazil on “Preservation, innovation and governance: the geographical indication of the vitiviniculture in jundiaí (Brazil) or “GIs and the concept of terroir for the development of local wine and sake clusters in Japan” by Toru Kodama (Japan).

写真1：本大会における筆者の発表風景



ンで開催された第六回 UNESCO-UNITWIN 会議 (6th UNESCO UNITWIN Conference 2019)⁽⁹⁾にて、研究発表を行い、大きな収穫を得ることができた。興味深いのは、それぞれの会議における参加者層の違いである。第11回国際ワインツーリズム会議の参加者はヨーロッパ中心の観光業者や観光ジャーナリストの方々が多く、Food & Society International Conferenceでは多様な食文化の研究者が参加していた。そして第六回 UNESCO-UNITWIN 会議では、メインテーマが「Value of heritage for tourism」であったこともあり、観光と文化遺産に関する多種多様な研究者が世界中から集まっていた。他方で、OIVの本大会は、ワインに関するありとあらゆる分野の研究者が世界中から集まってくるという点において、また特別な研鑽と国際ネットワークの機会を与えてくれた。

4. 本大会における他の研究発表

上述のとおり、本大会には、世界50か国から約750人の参加者があり、大会期間中に348の口頭による発表がなされた。そして、本大会の会場では、口頭発表以外に、世界各国からの参加者による様々なポスター発表の展示もなされた。

ここでは、本大会でなされた筆者以外の口頭発表について簡単に触れておきたい。

<本大会初日の研究発表>

本大会の初日(7月15日)の午前中には、会場となったジュネーブ国際会議場で最も大きなホール(写真2)において開会式が行われ、OIVのRegina Vanderlinde会長らが挨拶を行った。

続いて、グローバルなワイン産業動向を概観するという観点から、OIVのPau Roca事務局長が「State of the vitiviniculture world market」と題するプレゼンを行った。こちらは、OIV発行のレポート「OIV 2019 report on the world vitivinicultural situation」の内容に関するもので、同レポート及びプレゼンに用いられたパワーポイントはOIVのウェブサイトからダウンロード可能である⁽¹⁰⁾。

Pau Roca事務局長からのプレゼンに続いて、スイスのワイン産業を概観するという観点から、「Vitiviniculture in Switzerland」というタイトルのもとに、スイスのワイン関連団体であるIVVS (Interprofession de la vigne et des vins suisses) のMarco Romano

(9) 第六回 UNESCO-UNITWIN 会議のホームページ :

<https://ees.kuleuven.be/unitwin2019/proceedings/>

(10) OIV のホームページ :

<http://www.oiv.int/en/oiv-life/current-situation-of-the-vitivinicultural-sector-at-a-global-level>

会長、スイス醸造家協会 (Swiss Union of Oenologists/USOE) の Simone de Montmolin 会長らが、それぞれプレゼンを行なった。こちらは、本大会のホスト国となったスイスのワイン産業のPRを行う、という役割も担ったプレゼン内容となっていた。

本大会の初日 (7月15日) の午後には、午前の部と同じ大ホールにおいて、ワイン用ブドウ栽培における「農薬の使用」を科学的考察と消費者認識の両面から論じた「A reasoned approach to inputs: scientific contributions and consumer perception」と題する公開セッションが開催され、ドイツ、イタリア、フランスの研究者がそれぞれ登壇して、プレゼンを行った。ヨーロッパのワインづくりにおける持続可能性への関心の高まりと、その達成に向けた様々な課題を浮き彫りにした内容となっていた。なお、日本において、ワイン用ブドウ栽培における農薬使用の問題が論じられることは少なく、この点においてヨーロッパとの隔たりを感じた。

<本大会二日目及び三日目における研究発表>

本大会の二日目 (7月16日) 及び三日目 (7月17日) の午前及び午後において、「Viticulture」「Oenology」「Economy and Law」「Safety and Health」の四つのカテゴリーにおける口頭発表が、カテゴリー別に同時並行で別々の部屋において行われた (写真3)。資料2として本大会の全体スケジュールを以下に掲載したので、そちらを参照されたい。筆者は、本大会二日目・午前の「Economy and Law」のカテゴリーにおける第一部発表会において口頭発表を行ったことは上記のとおりである。

筆者は、研究対象との関係から、「Economy and Law」のカテゴリーで行われた様々な口頭発表を中心に拝聴した。このカテゴリーでなされた口頭発表のテーマで多かったのは、ワインづくりにおける環境負荷の軽減を目的としたサステナビリティ推進制度に関するものと、各国の地理的表示 (GI/geographical indication) に関するものであった。また、「ワインに関するブランドストーリー (storytelling) は消費者の購買行動やワインの価格にどのような影響を及ぼすか」という観点からの発表も二つほど行われた。これらテーマは全て、ワインツーリズムの推進という観点からも重要なテーマである。

ワインづくりにおける環境負荷の軽減を目的としたサステナビリティ推進制度に関しては、以下のような発表がなされた。

- ・ “Inventory of environmental certifications throughout the world” by Valérie Lempereur, Mélanie Balazard, Carine Herbin (France)
- ・ “From soft law to hard law: what kind of legislation for environmental quality of wines produced under geographical indication?” by Ronan Raffray, Sylvain Boivert (France)
- ・ “Analysis of the perceptions of wine consumers toward environmental approaches:

- support for the management of environmental strategy” by Diana Ugalde,
Frédérique Jourjon, Ronan Symoneaux (France)
- ・ “Sustainable Coffee and Wine: Standards and Challenges Compared” by Morten Scholer (Switzerland)
 - ・ “To be or not to be (organic): Sustainable transitions in Castilla y León’s wines” by Ana Esquinas Rychen (Switzerland)
 - ・ “Navigating estates’ sustainability: innovation, transparency & communication” by Marc Dressler (Germany)

上述のとおりフランスからの三つの研究者グループが、このテーマについてそれぞれ発表を行っており、同国における同テーマへの関心の深さが窺えた。実際のところ同国では、ボルドーやシャンパーニュを含む主要ワイン産地において、ワインづくり（ブドウ栽培・ワイン醸造）における環境負荷の軽減を目的とした様々なイニシアチブが果敢に推進されている⁽¹¹⁾。この背景には、それらワイン産地における農業使用が人体や生物多様性に与える悪影響について、厳しい批判の目が向けられてきたという事実がある。

上記リストで列挙した発表のなかでは、本大会三日目（7月17日）の午前にボルドー大学教授のRanan Raffrayさんらが行った「From soft law to hard law: what kind of legislation for environmental quality of wines produced under geographical indication?」と題する発表（上記リストの上から二番目）が会場において高い注目を集めており、質疑応答タイムにおいて矢継ぎ早に質問がなされていた。また、同じく本大会三日目（7月17日）の午前にスイス人で元国連職員のMorten Sholerさんが行った「Sustainable Coffee and Wine: Standards and Challenged Compared」（上記リストの上から四番目）と題するワインとコーヒーの持続可能性推進制度を比較考察した発表も、会場において高い関心を集めており、こちらも質疑応答タイムにおいて矢継ぎ早に質問がなされていた。筆者自身、Raffrayさん及びSholerさんとは、コーヒーブレイクの時間帯で幾つか意見交換をさせていただいた。Sholerさんは、国連職員時代に発展途上国でコーヒー栽培の技術支援を行っていたことがあるとのことで、本大会でのプレゼン内容は、「Coffee and Wine – Two Worlds Compared」と題する2018年に出版したご自身の著書にもとづくものであるとのことであった。

他にも、上記リストのトップにある「Inventory of environmental certifications throughout

(11) Kodama, Toru (2020). GI as a Tool for the Development of Regional Wine Brands and Wine Tourism in Japan. In *Proceedings of the 6th UNESCO UNITWIN Conference 2019*, edited by Dominique Vanneste and Wesley Gruijthuijsen. Retrieved from <https://ees.kuleuven.be/unitwin2019/proceedings/>

the world」という発表は、世界22カ国の54の環境認証制度を比較研究するという内容で、大変興味深いものであった。

地理的表示制度に関しては、筆者による日本の地理的表示制度に関する発表以外に、フランス、ブラジル、中国、ウクライナ、トルコからの研究者による発表が行われた。なお日本の地理的表示制度に関しては、筆者からの発表（上記参照）以外に、本大会二日目（7月16日）の午前の第二部において、明治学院大学教授の蛭原健介さん及び大村真樹子さんから「Value and protection of geographical indications by Japanese Wine Law」と題する発表が行われた。本大会の全参加者約750人中、日本から参加したのは、筆者とこの明治学院大学のお二方のみであった。

「ワインに関するブランドストーリー（storytelling）は消費者の購買行動やワインの価格にどのような影響を及ぼすか」というテーマについては、スペインの研究者からの「Tapping into the Emotions of the Wine Consumer Through Storytelling: A Case Study」と題する発表と、イタリアの研究者からの「On the Effects of Storytelling on Wine Price」と題する発表がそれぞれなされた。ワイン関連研究においては、こうしたブランド情報発信の効果に関する研究も数多くなされている。

なお本大会でなされた全発表（口頭発表及びポスター発表）のタイトル・日程及びAbstractは、OIVのホームページからダウンロード可能な本大会のCongress ProgrammeおよびBook of Abstractsをそれぞれ参照されたい⁽¹²⁾。

<国際ワイン法学会総会（AIDV）への参加>

参考までに、OIVのオブザーバー機関でもある国際ワイン法学会（AIDV/International Wine Law Association）の総会が、OIVの本大会の日程に合わせるかたちで、2019年7月21日から23日にかけてスイスのローザンヌにおいて開催された。筆者は、同学会事務局長のYann Jubanさんと事前にコンタクトをとり、同氏から許可をいただいで、同総会における7月21日の研究発表会とガラディナーに参加した（写真4、5）。

同研究発表会においては、「Wine and Health Law Prognosis」「Are WTO/FTA Panels Useful?」「Judges' panel - Remedies: flexibility for a modern era. How far can Judges go?」「The many aspects of alcohol-related e-commerce」という四つの発表及びパネルディスカッションが行われた。その日の夜に参加したガラディナーにおいては、映画界の巨匠であるフランシス・ Coppola監督が運営するワイナリー企業「The Family Coppola」の顧問弁護士である日系アメリカ人のKen Minamiさんと席が隣同士となり、日米のワイン業界等について様々な情報交換を行うことができた。

(12) OIVのホームページよりダウンロード可能：

<http://www.oiv.int/en/the-international-organisation-of-vine-and-wine/oiv-congress>



写真 2 : 本大会開会式会場



写真 3 : 本大会での研究発表風景

SUNDAY July 14, 2019		MONDAY July 15, 2019		TUESDAY July 16, 2019				WEDNESDAY July 17, 2019				THURSDAY July 18, 2019	FRIDAY July 19, 2019	
		Room 1		Room 1	Room 2	Room 3	Room 4	Room 1	Room 2	Room 3	Room 4	Room 1	Room 2	
8:00														8:00
8:30		Registration open P. 17		Viticulture P. 18	Oenology S1 P. 20	Economy and Law P. 23	Safety and Health P. 25	Viticulture S1 P. 29	Oenology S1 P. 34	Economy and Law P. 38	Viticulture S2 P. 31			8:30
9:00				Coffee Break & Posters Session				Coffee Break & Posters Session					OIV COMEX P. 76	9:00
9:30				Coffee Break & Posters Session				Coffee Break & Posters Session					17 th OIV General Assembly P. 76	9:30
10:00				Coffee Break & Posters Session				Coffee Break & Posters Session					17 th OIV General Assembly P. 76	10:00
10:30		Opening Ceremony P. 17		Viticulture P. 18	Oenology S1 P. 21	Economy and Law P. 24	Safety and Health P. 26	Viticulture S1 P. 29	Oenology S1 P. 34	Economy and Law P. 38	Viticulture S2 P. 32			10:30
11:00				Lunch Terroir Valais				Lunch Terroir Ticino					Coffee Break P. 76	11:00
11:30				Lunch Terroir 3 Lacs				Lunch Terroir Ticino					17 th OIV General Assembly P. 76	11:30
12:00		Wine tasting		Lunch Terroir 3 Lacs				Lunch Terroir Ticino					17 th OIV General Assembly P. 76	12:00
12:30				Lunch Terroir 3 Lacs				Lunch Terroir Ticino					Lunch (GA delegates) Terroir Deutschland P. 76	12:30
13:00		Lunch Terroir Valais		Lunch Terroir 3 Lacs				Lunch Terroir Ticino				Bus departure from CIGG		13:00
13:30				Lunch Terroir 3 Lacs				Lunch Terroir Ticino				Technical Visits		13:30
14:00				Lunch Terroir 3 Lacs				Lunch Terroir Ticino						14:00
14:30				Viticulture P. 19	Oenology S1 P. 22	Economy and Law P. 25	Oenology S2 P. 22	Viticulture S1 P. 30	Oenology S1 P. 35	Oenology S2 P. 36	Viticulture S2 P. 33			14:30
15:00		Common session		Viticulture P. 19	Oenology S1 P. 22	Economy and Law P. 25	Oenology S2 P. 22	Viticulture S1 P. 30	Oenology S1 P. 35	Oenology S2 P. 36	Viticulture S2 P. 33			15:00
15:30				Coffee Break & Posters Session				Coffee Break & Posters Session						15:30
16:00				Coffee Break & Posters Session				Coffee Break & Posters Session						16:00
16:30	Registration open	P. 17		Commission I - Viticulture	Commission II - Oenology	Commission III - Economy and Law	Commission IV - Safety and Health	Viticulture S1 P. 31	Oenology S1 P. 36	Oenology S2 P. 37				16:30
17:00		Get Together Drink		Bus departure from CIGG - 15:00				Bus departure from CIGG - 18:00					Bus departure from CIGG - 15:00	17:00
17:30				Bus departure from CIGG - 15:00				Bus departure from CIGG - 18:00					Journey to Vevey	17:30
18:00	Welcome drink CIGG P. 79			Bus departure from CIGG - 15:00				Bus departure from CIGG - 18:00						18:00
18:30				Bus departure from CIGG - 15:00				Bus departure from CIGG - 18:00						18:30
19:00				Bus departure from CIGG - 15:00				Bus departure from CIGG - 18:00						19:00
19:30		Cultural Evening BFM - Geneva P. 79		Evening in the Geneva vineyards Countryside - Geneva P. 81				Gala Dinner Porte des Iris - Vuillerens, Vaud P. 82					Free Dinner	19:30
21:00	Free Dinner			Evening in the Geneva vineyards Countryside - Geneva P. 81				Gala Dinner Porte des Iris - Vuillerens, Vaud P. 82					Fête des Vignerons* Vevey	21:00

資料 2 : 本大会の全体スケジュール (本大会の Congress Programme からの抜粋)



写真 4 : AIDV 総会の光景



写真 5 : AIDV 総会の光景

5. 国際ネットワーク及びスイスのワイン文化外交の場としての本大会

年に一回開催されるOIVの世界大会は、世界中からワイン関連の専門家が集まり、ワイン業界をとりまく最新の重要課題について、様々な観点から研究発表及び意見交換を行う場である。この点においてOIVの世界大会は、ワイン分野における世界最大の研究者集会と言っても過言ではないであろう。同時に、OIVの世界大会は、世界中から参加するワイン関連の専門家がお互いにネットワークする場でもある。世界50カ国から約750人の参加者があった本大会も、ワイン研究者の国際ネットワークの場としての機能を十分に発揮していた。

まず、本大会の初日（7月15日）からの三日間、会場となったジュネーブ国際会議場のオープンスペースにおいて昼食パーティが行われた（写真6, 7）。また本大会初日の夜には「Cultural Evening」と称されたネットワーキングパーティが、ジュネーブ駅から歩いて10分程のところにある、かつて発電所であった建物を劇場に改装したというBFM (Bâtiment des Forces Motrices) と呼ばれる会場にて行われた（写真8, 9）。本大会二日目の夜には、ジュネーブ郊外にある三つの違うワイン産地において同時並行でディナーパーティが行われた。参加者はそれら三つのうちからひとつを選んで参加するという形式であり（それぞれ送迎バス付き）、筆者は、この三つの会場のうちRight BankにあるDomaine des Bossonsで開催されたディナーパーティに参加した（写真10, 11）。さらに三日目の夜には、ヴォー州のワイン産地であるラ・コート（La Côte）にあるPortes des Irisと呼ばれる会場においてガラ・ディナーが開催された（写真12, 13）。これらイベントは、全て、世界中からやってきた本大会の参加者がネットワークするための格好の機会を提供していた。筆者も様々な国々からのワイン研究者と名刺を交換し、情報交換を行った。

そしてこれら国際ネットワークの場は、スイス産ワインや同国のワイン産地の魅力を参加者に知ってもらうための場、いわばスイスのワイン文化外交の場としても存分に機能していた。スイスは、わずか九州ほどの国土ながら、同国にある26州の全てにおいてワインが生産され、国内で栽培されているブドウ品種は約250種類もある。中でも、白ワイン向けの品種であるシャスラ（Chasselas）の栽培が盛んで、赤ワイン向け品種としてはピノワールの栽培が活発に行われている。しかし、スイス産ワインの大半が国内で消費され、輸出は全体の生産量の2%未満である。ジュネーブで開催された本大会での様々な国際交流の場においては、多種多様なスイス産ワインが振る舞われており、世界中からやってきたワインのプロフェッショナル達に対するPR効果は非常に大きかったのではないかと思う。

ヨーロッパ中央部に位置するスイスには、隣接するイタリアやフランスを含め、ヨーロッパの様々な国々から多種多様なワインが輸入されてくる。本大会初日の午前中に

OIVのPau Roca事務局長が行った「State of the vitiviniculture world market」と題するプレゼンの中でも紹介されたとおり（上記参照），スイスは，1人当たりのワイン消費量が年36リットルであり，この点において世界第四位の地位にある。（ちなみに同じデータによれば，日本における1人当たりのワイン消費量は年3リットルである。）スイス国内で消費されるワインのうち，国内産ワインは3割ほどであり，消費されるワインの多くは輸入ワインである。つまりスイスのワイン産業は，国内市場における輸入ワインとの激しい競争を常に意識しなければならない立場にある。この点においてスイスのワイン産業は，国内市場の67%近くを輸入ワインが占め，国内産ワインのシェアは5%に満たないという状況に置かれている日本のワイン産業とも似ている。両国のワイン産業の国際比較研究は，興味深い視点を提供してくれるだろう。

なお，本大会四日目（7月18日）には，三湖地域（Three-Lakes），ヴォー州（Vaud），ヴァレー州（Valais）という三つのワイン産地のいずれかを訪問するための複数のツアーが用意され，本大会参加者はそれらツアーの中からひとつを選んで参加した（資料3）。筆者は，ヴァレー（Valais）州を訪問するための四つのツアーのうち，スイス連邦政府の農業研究機関Agroscopeが運営するワイン用ブドウ栽培の実験圃場及び他の周辺ワイナリーへの訪問が組み込まれていたツアー（Itinerary 10）に参加した。Agroscopeの圃場では，同研究機関の研究者から，筆者を含んだツアー参加者に対して，ワイン用ブドウの栽培に関する様々な研究内容に関するプレゼンを頂いた（写真14, 15）。このツアーも，国際交流の場であると同時に，スイスのワイン産地の魅力やワイン生産者の取り組みを世界中からやってきた本大会参加者に伝えるための試みとして成功していた。

なお，本大会におけるこうしたスイスのワイン文化外交の場では，多種多様なスイス産チーズが振る舞われることも多く，ヨーロッパ有数のチーズ文化大国としての同国の国家ブランド浸透の場としても機能していた。



写真6：本大会での昼食パーティ



写真7：本大会での昼食パーティ



写真8：Cultural Eveningの風景



写真9：Cultural Eveningの風景



写真10：Domaine des Bossonsの外観



写真11：Domaine des Bossonsでのディナー



写真12：ガラディナー会場前にて



写真13：ガラディナー会場前にて



写真14：Agroscopeのブドウ栽培圃場にて



写真15：Agroscopeのブドウ栽培圃場にて

資料3：本大会四日目のツアースケジュール

(本大会のCongress Programmeからの抜粋)

3 LACS and Around	VAUD (La Côte, Lavaux, Chablais)	VALAIS
3 Lacs – Itinerary 1 <ul style="list-style-type: none"> • Viniterra and Maison des vins du Lac de Biene • Domaine de la Ville de Berne • Château d’Auvornier 	Vaud – Itinerary 4 <ul style="list-style-type: none"> • Agroscope, Changins • Domaine de la Capitaine • Cave de la Côte • Vinorama 	Valais – Itinerary 8 <ul style="list-style-type: none"> • Domaine Provins Uvrier • Cave Amédée • Celliers de Sion
3 Lacs – Itinerary 2 <ul style="list-style-type: none"> • Les Vins Porrets • Domaine de la Ville de Berne • Funicular and Domaine Festiguat 	Vaud – Itinerary 5 <ul style="list-style-type: none"> • Les Frères Dutruy • Agroscope, Changins • Château d’Aigle • Badouxthèque 	Valais – Itinerary 9 <ul style="list-style-type: none"> • Maison Gilliard • Clos Tsampéhro • Celliers de Sion
<p>Technical visits’ detailed information are available on the congress mobile application (programme, schedule...)</p>	Vaud – Itinerary 7 <ul style="list-style-type: none"> • Domaine Henri Cruchon • Cave des Viticulteurs de Bonvillars • La Fabrique - A Champagne • Fromagerie Gourmande 	Valais – Itinerary 10 <ul style="list-style-type: none"> • Domaine Grand Brûlé and Agroscope • Domaine du Mont d’Or • Celliers de Sion
		Valais – Itinerary 11 <ul style="list-style-type: none"> • Domaine Rouvinez • René Favre et Fils • Celliers de Sion

6. フェット・デ・ヴィニュロン (Fête des Vignerons) の視察

本大会の最終日（7月19日）の午後のプログラムには、ヴォー（Vaud）州のレマン湖畔にあるヴヴェイ（Vevey）という街で開催された盛大なワイン生産者の祭り「フェット・デ・ヴィニュロン（Fête des Vignerons）」への参加ツアーが組み込まれており、筆者も他の本大会参加者とともにこのツアーに参加した。

フェット・デ・ヴィニュロンは、ヴヴェイのワイン生産者組合 Confrérie des Vignerons

de Veveyが1797年に開催した祭りが始まり、という長い歴史を誇る伝統行事で、ブドウ栽培とワイン造りの伝統を称える目的で、約20年毎に開催され、今回は1999年に開催された。フェット・デ・ヴィニユロンは2016年にUNESCOの無形文化遺産に登録されている。

筆者が参加した2019年のフェット・デ・ヴィニユロンは、7月18日から8月11日の間で行われた。この間、過去最大規模の約100万人がヴヴェイを訪問し、事業経費は約1億フラン(約108億円)であった⁽¹³⁾。その莫大な開催費用は、フェット・デ・ヴィニユロンの中で行われるショーの参加チケット代金と企業からのスポンサー料金で賄われることとなっていたが、最終的には1500万フラン(約16億円)の赤字になったという⁽¹⁴⁾。

さて、7月19日の参加当日の午後3時に、OIV世界大会からの本ツアー参加者全員が、ジュネーブ国際会議の前に集合した。正確な数字は分からないが、200人ぐらいが集まっていたように思う。そこから数台の大型バスに分かれて便乗し、ジュネーブ近郊にあるレマン湖畔の港に向かった。その港に到着後は、OIV事務局が手配したクルーズ船(写真16, 17)に乗り込んで、ジュネーブから見て反対側にあるヴヴェイの港へと向かった。その船旅の途中、レマン湖北岸にあるラヴォー(Lavaux)地区に広がるワイン用ブドウの段々畑の風景を見ることができた(写真18)。この一帯は、2007年に「ラヴォー地区の葡萄畑(Lavaux, Vineyard Terraces)」の名でユネスコの世界遺産(文化遺産)に登録されている。

ヴヴェイの港に到着後、すぐに目に入ってきたのは、フェット・デ・ヴィニユロンの会場となった2万人が収容できる野外アリーナであった(写真19)。また、フェット・デ・ヴィニユロンにおいて毎日行われるショーに出演する5000人以上の俳優の大半が、無給のボランティアの方々とのことで、そうしたボランティアの俳優と思しき、色とりどりのコスチュームを身にまとった大人や子供が、町中に溢れかえっていた(写真20～23)。フェット・デ・ヴィニユロンの運営のために、さらに5000人のスタッフが裏方として働いたとのことだが、その大半も無給のボランティアとのことである。つまりこの伝統ある行事は、市民によるボランティア精神によって成り立っているのである。

フェット・デ・ヴィニユロンのショーが行われる野外アリーナには、午後8時ごろに入ったのだが、すでに2万人収容可能な同アリーナの席が人で埋め尽くされていた(写真24)。筆者が座った席の前方には、OIVのRegina Vanderlinde会長を含むOIVの幹部が陣取って座っていた(写真25)。ショーは、午後9時ごろから開始し、終わったのは午前0時過ぎであった。その3時間ほどの間、一度に100人以上の出演者が、野外ア

(13) SWI swissinfo.chのウェブニュースを参照：https://www.swissinfo.ch/eng/winegrowers-festival_f%C3%AAte-des-vignerons-see-you-in-20-years-/45156020

(14) SWI swissinfo.chのウェブニュースを参照：https://www.swissinfo.ch/eng/winegrowers-festival_f%C3%AAte-des-vignerons-seeks-millions-to-fill-financial-hole/45268172

リーナの真ん中にあるステージにおいて、入れ替わり立ち替わり、多種多様な劇やダンス、歌を披露した(写真26~28)。そのステージのフロア全体がLEDを使った千メートル四方のインタラクティブ・フロア・システムとなっていて、その上で行われる劇やダンス、歌に合わせて、様々な映像を映し出し、極めて幻想的な空間を創り出していた。なおこのLEDフロアは、アメリカンフットボールの祭典「スーパーボウル」やヨーロッパの音楽コンテスト「ユーロヴィジョン・ソング・コンテスト」で使われたLEDフロアの5倍の大きさで、世界最大の広さであったという⁽¹⁵⁾。

ショー全体の演出は、ソチやトリノの冬季オリンピックの閉会式を手掛けたダニエル・フィンジ・パスカ氏が手掛けたとのことであったが、上述のとおり、出演者の多くは無給のボランティアで、にもかかわらず非常に完成度の高いパフォーマンスを見せていて、この出演のために長い月日をかけて訓練してきたことが窺い知れた。ショーのクライマックスでは、牛飼に扮した何十人という俳優と、何十頭という本物の牛が登場し、伝統的な牛追い歌「ラン・デ・ヴァシュ」が流れ、会場の雰囲気は最高潮に達した(写真29)。そして最後に、出演者全員がもう一度ステージに次々と現れて、大歓声の中でこの日の壮大なショーが終了した(写真30)。その後、筆者を含むOIV世界大会からの参加者は、OIV事務局が手配した数台のバスに分かれて便乗して帰途についた。そしてこのツアーの参加を持って、OIVの第42回世界大会の全プログラムが終了した。

なお筆者は、この次の週に、ヴヴェイを再度訪問し、さらにそこからローザンヌに向かってレマン湖北岸に広がるラヴォー地区のワイン用ブドウ畑一帯において、ワインツーリズムに関する現地調査を行った。上述のとおり、この一帯は、2007年に「ラヴォー地区の葡萄畑(Lavaux, Vineyard Terraces)」の名でUNESCOの世界遺産(文化遺産)に登録されており、ワインツーリズムのための観光コースが整備されていて、年間を通して多くの観光客が訪れる地域である。この地域一帯は、法規制や地元のイニシアチブのもとで文化的景観の保全がなされており、広大なブドウ栽培用の段々畑と伝統的な建築物が織りなす美しい風景が保たれている(写真31~33)。この現地調査における研究成果については、また別の機会に発表したいと思う。

(15) SWI swissinfo.chのウェブニュースを参照：https://www.swissinfo.ch/eng/f%C3%A4tendes-vignerons_how-vevey-organises-its-once-in-a-lifetime-winegrowers-festival/45035540



写真16：ヴヴェイへ向かうクルーズ船



写真17：クルーズ船での記念撮影



写真18：ラヴォー地区の段々畑の風景



写真19：野外アリーナの外観



写真20：舞台用コスチュームを着た人々



写真21：舞台用コスチュームを着た人々



写真22：舞台用コスチュームを着た人々



写真23：舞台用コスチュームを着た人々



写真24：ショーの開始を待つ観客



写真25：OIVのRegina Vanderlinde会長



写真26：ショーの光景



写真27：ショーの光景



写真28：ショーの光景



写真29：クライマックスでは本物の牛が登場



写真30：最後に全出演者が再登壇



写真31：ラヴォア地区のワインツーリズムルート



写真32：ラヴォー地区のワインツーリズムルート

写真33：ラヴォー地区のワインツーリズムルート

7. 結びにかえて

2020年11月にチリでの開催を予定していたOIVの第43回世界大会は、昨今のコロナ禍により中止となった。その大会で予定されていたメインテーマは、「Adaptation to new scenarios: production, social and market challenges」であったが、今後は、コロナ禍で打撃を受けた世界のワイン産業をどのように活性化させていくのかという意味でのnew scenariosが、最重要トピックの一つとして、世界のワイン産地を巻き込んで盛んに語られていくだろう。

兎にも角にも、筆者は、本大会での研究発表及び多種多様なプログラムへの参加により、ワインと人間・社会・文化との結びつきに関する多種多様な国際的視点を拡充することができた。これを糧に、研究教育活動にますます精を出していきたい。

<参考文献>

- Compés López, Raúl (2019). International Wine Organizations and Plurilateral Agreements: Harmonization Versus Mutual Recognition of Standards. In *The Palgrave Handbook of Wine Industry Economics*, edited by Alonso Ugaglia, Adeline, Cardebat, Jean-Marie, Corsi, Alessandro. Palgrave Macmillan.
- Kodama, Toru (2020). GI as a Tool for the Development of Regional Wine Brands and Wine Tourism in Japan. In *Proceedings of the 6th UNESCO UNITWIN Conference 2019*, edited by Dominique Vanneste and Wesley Gruijthuijsen. Retrieved from <https://ees.kuleuven.be/unitwin2019/proceedings/>
- Kodama, Toru (2019). GIs and the concept of terroir for the development of local wine and sake clusters in Japan. *BIO Web Conference, Volume 15*, 42nd World Congress of Vine and Wine. Retrieved from <https://doi.org/10.1051/bioconf/20191503006>

本稿の脚注において掲載したインターネットリソースは、すべて2020年7月14日に閲覧した。